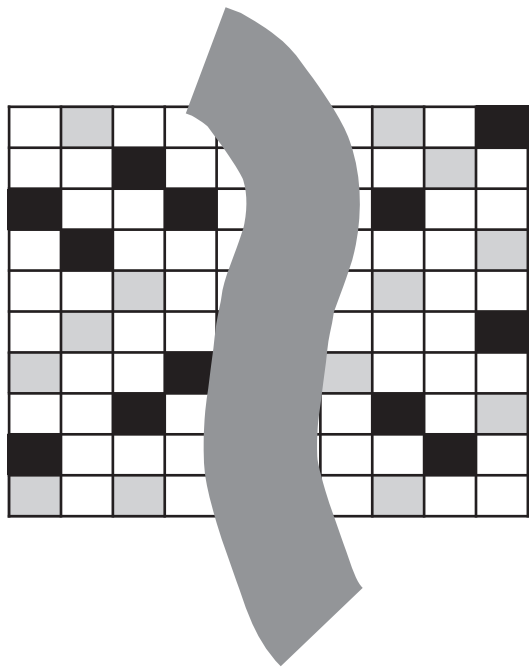

月 刊

MéLange

VOL.89



2014.02.16

詩と評論

月刊

「MéLange」 VOL.89

2014/02/16

月刊「MéLange」編集部

映画「ハンナ・アーレント」

新連載★

ミニシアター系の映画にもかかわらず、結構な観客動員数と聞く。ハンナ・アーレントはA woman of this century (二十世紀を代表する女性(一人))とニューヨークタイムズが評した政治思想家である。生涯を通して全体主義の批判と国家のあり方、ポピュリズムを追求し続けた。一方、彼女の魅力はドラマチックな人生にあるかもしれない。何故いま、アーレントなのか。シネ・リーブスは平日にもかかわらず客席が半数埋まる状態のなかで、私はこの人たちがどれだけアーレントの著作を理解しているのか訝しむつつも、「人間の条件」の字面を追うのがよつとの自分が可笑しかった。

映画はニューヨークでの学者生活とエルサレムでのアイヒマン公開裁判を中心に描かれている。アーレントの波瀾に満ちた生涯を興味本位に取り上げるのではなく、アイヒマン裁判を通して人間の悪行の本質を鋭く突いていく姿勢に焦点を当てたのは成功といえるだろう。

ニューヨーク誌の記者としてエルサレムでのアイヒマン裁判を傍聴するが、彼女は彼がナチのホロコーストを実行する中心人物にもかかわらず、その平凡な小役人然とした人間像に激しい違和を覚える。その違和感がアーレントの思想の切り口になり、「悪」の本質、無思考に陥ることは誰にでも起きうることであり、これを「悪の凡庸さ」と論じる。またユダヤ人指導者にナチスの協力者が居たこ

H A N N A 便り 01

ともにも言及する。論文が発表されるや、アーレントは激しい非難にさらされる。同胞のユダヤ人社会からも孤立していく。監督マーガレーテ・フォン・トロッタはこの状況を些細なプロットを積み重ねながら描く。

終盤の学生への講義が圧巻だった。数分間だが随分と長く思われた。ここで初めてアーレントは論文の本意の確認と、非難への反論を行う。アイヒマンの擁護ではなく「悪」の平板さ、思考停止の罪をあげていく。アイヒマンは悪魔でも邪悪な人間でもない。ただ命令に従っただけであると。世界最大の悪業は平凡な人間の行う悪であり、善悪の判断を放棄し「悪」を行うのは人間であることを拒絶した者だと断じる。

アーレントは夫や数少ない友人に支えられ自説を通していく。大学教師の除籍処分を拒否する。彼女の論説が説得力を持つのは自身が母国ドイツからナチスの手を逃れ、フランスでの収容所生活を経てアメリカへ亡命したユダヤ人であり、生粋のシオニストであるという背景がある。

ささやかなエピソードとして一八歳のアーレントがハイデッカーに出会う場面がある。生涯を通じて二人は複雑な師弟関係を保ち続けるのだが、ファンンの好奇心に答えてだろう。一八歳のアーレントは驚くほど美しい。

中堂けいこ

詩

「月刊めらんじゅ」89号目次

訣別……………	岩脇リーベル豊美	4
わたしの言う……………	月村香	5
野原の隅に生きものがいる……………	中嶋康雄	5
祝福……………	野口裕	6
川柳連作 おとうとのおはなし……………	情野千里	6
耳をすませると……………	川田あひる	7
暗喩の森——ハンナ・アーレントに……………	福田知子	8
星をなぞる……………	上野都	9
火の葡萄……………	有時秀記	10
いつか来たこの街の遮断されたこの街に……………	大橋愛由等	11
虚無僧……………	中堂けいこ	12
女神……………	寺岡良信	13
Fruit of Passion——兵庫県立美術館にて……………	高谷和幸	14
歌……………	富哲世	15

エッセイ

新連載／HANNAだより01〈映画「ハンナ・アーレント」〉……………	中堂けいこ	3
〈神戸詞あしび〉78「19回目の奄美ふゆ旅 ぼくの島酔いは続く」……………	大橋愛由等	16

編集部だより★10／第89回「Melange」読書会の発表者は、神尾和寿さん。テーマは「ハイデッカーとヘルダーリン」。大学で哲学を教える詩人である。三年前となるがたまたま私と同時期(平成23年)に「芸術団体半どんの会「現代芸術賞」を受賞されている。ひな壇で臨席させていただいた仲である。／今号から新連載が始まる。「月刊めらんじゅ」誌友の中堂けいこさんが執筆担当。中堂さんのきらめく感性が展開されるものと期待している。／二月の神戸は雪は降ったが積もることは殆どなかった。それでも六甲連山を見上げると冠雪していることに気づく。今はまったきの冬である。(大橋記)

◆訣別

岩脇リーベル豊美

訣別の瞬きだった

わたしを訣別に導いた忘れられない言葉は
なにげない日常では忘れていられるのに
蒼穹の景色を見てしまうと再生され
悲しみとも怒りとも区別のつかない
透明のみずうみが現れる

空気の微動にさえ痛む闇のなかで
眼球を砕き割る夢語りの扉が開く
そして

聴覚だけが冴える冥の領域にいたのか
旅程の亀裂とおなじだ
うねりの文様とおなじだ

浄土が湧き出したような煙きを放つ肉腫に
人間には真似のできない声で啼く鳥が
何処からだろうか
過去からだろうか
もはや季節の終わりを宣告する

よく仕掛けられるあの罠に
誘き出されないように
忘却のその罠とはかわらないように
劇的な他動性で話しかける
命懸けの鬼ごっこをしよう

誰もが
ひとりで迎える夜のための準備に夢中だ

◆わたしの言う

月村香

限りもなく愛していますと言うくる
み園の幼舎でわたしはそのくらい小
さくあつたしなんといつてもいつも
ペンをひろって歩いた右の草左の自
由の女神同年の男の子からはかえで
をもらっただからあなたには鮮やか
な色のかえるをわたくしには美しい
うたをそれでいいそれですべては静
かにかき消されてゆくなぜなら雨も
雪ももう降らないからと彼らがちか
つていたからわたしにはどうもこう
も甘ったれた世界がくるみ色に流れ
てきてもうすぐそこで結ばれるのだ

◆野原の隅に生きものがいる

中嶋康雄

その生きものには足がたくさんある
足はてんでばらばらにしか動かないので
どこへも行きようがない
卵からかえったその場所で
ただ

ぞろぞろぞろぞろ
足を動かし続けている
光と空気があればとりあえず
死なない
当分は雨も降る
食べたり食べなかつたりする
飲んだり飲なかつたりする
空気を吸ったり吸わなかつたりする
体が

かたくてかたくて
くさくくてくさくくて
つまらないので
食べられない
ぞろぞろぞろぞろ
生きながらえる
そして
ぞろぞろぞろぞろ
卵を産み始める

◆祝福

野口 裕

何も言わなかったし言えなかった
 綾なす光の波頭も
 板子一枚下の地獄も
 何も言わず声を出し続けた
 不時着から取り出すボイスレコーダーのように
 恋人ができて分かれて
 新しい人と新しい家をつくるころ
 不意に吊革の下にある脳髓は
 再生するだろうか
 私の声を

鏡の向こうからこちら側へ
 声が一瞬渡れば
 あなたの記憶は向こう側に飛ぶ
 小さな鳥がちらちら見せる
 鮮やかな色のように

そしてゆつくりと現実に戻ってくる
 板子一枚下の地獄も
 綾なす光の波頭も

これは預言ではないのだけれど

◆川柳連作

おとうとのおはなし

情野千里

私の二人の死んだ弟は、負けず劣らず話し好き。生まれて百日でこの世を去った長弟・マスオ。言葉を知らぬまま逝って、白い五躰のおしゃべりは姉の舞踏といい勝負。次弟・イクオは理屈放き。54で死ぬ残念無念、怨みつらみの百万遍。姉の川柳とおつつかつつ。「そもそも、聴かねば聞こえぬおはなしとぞ・・・」

多羅葉に東柱・一柱の文字が浮く
 夜市には兄が埋めたドングリばかり
 揺れている兄のまつげと青い芥子
 林檎も梨もわが一族の白い花
 かさざぎが牽く櫓 青い兄がいる
 白い兄 蹴られてカツと目を開く
 お前を産んだ朝の母はと兄の沈黙
 兄と遊ぶ金盞花の花降る冬の夜は

◆耳をすませると

川田あひる

ふわふわの
 パンを
 自転車にのせ
 ふるさとが
 変わりゆくじかんを
 走った
 わたしの家は
 貧しい人のための診療所になるという
 祖父も元気で
 成り上がり者も
 過程にあった
 わたしはパンを欲していた
 妊婦にも分けなにかまえて
 ふわふわを
 口に溶かす

誘惑に胸を満たし
 自転車を走らせた
 飢餓の
 時代は 遠く
 敗戦孤児でもあるまいに
 わたしの執着は並ではなかった
 しかし、迂回したゆえに
 辿りつけないまま
 パンはかびた
 うまいかどうか
 もつたいないことをしたが
 喰えなかった後悔はないことに
 安堵し
 月を 見上げた
 耳をすませると
 月面を横切る
 渡り鳥の
 声が
 聞こえる

◆暗喩の森

——ハンナ・アーレントに

福田知子

一九六〇年 アーレントはことばにしようとした
誰もが視えなかった
凡庸な悪 陳腐な悪を

ハンナ・アーレント

イエルサレムのアイヒマン
——私は事務的な仕事をしただけ
——善悪？ 何も考えていなかった
——命令に従っただけ 誰も直接には殺していない
法廷での発言に
あつげにとられる
アイヒマン裁判

かつてナチスSSだった凶悪な怪物アイヒマン
・・・平凡な人物ではないか
透明な檻に捕えられた野獣の素顔は
陳腐で凡庸な市民
ずわぎわ騒ぐ ぐいぐい悔い込む 痛烈な記憶
ユダヤ人 ハンナ・アーレント
沈め 鎮めても なおも動いている
人としての思考

アーレントの思考 これは
マルティン・ハイデガー譲り？
若かった日の記憶
鮮烈過ぎる 記憶

紫煙
寝転ぶ
紫煙
ため息
紫煙
ソファ
また 紫煙

『全体主義の起源』により
人類の犯した「根源的な悪」を人びとの記憶に留めた
それには誰もが同意した が
アイヒマンの行為を「凡庸な悪」と名付けた彼女は
誹謗中傷の嵐に巻き込みこまれていった
ナチスに負担するの か！ と
しかし さらにアーレントは言う
「ユダヤ人評議会の存在がなければ
六百万人もの犠牲者は考えられなかった」
致命的な中傷の渦に彼女を巻き込んだ この発言
「評議会は被害者と加害者の両義性をもつ
密告したのも被害されたのもこの存在があつたからこそ」

悪の根源は凡庸だからこそ

いかなる時代でもいかなる体制でも芽を出すだろう
アイヒマンはあなたでも私でも誰もがなりえたかもしれない・・・

私は

こうした結論でしか締め括れない
凡庸に あまりに凡庸に 人類の正義によって——

アーレントは
絶えず紫煙の内にはいた
そこに吹いている「風」を暗喩とした
詩的すぎる と揶揄されながら
いのちがけの詩をかいた

◆星をなぞる

上野 都

触れてしまったのか 星の座標に
時計まわりに一つ
北を指して

砕け散る霧氷
まつ毛の先に積む光跡
シリウス ベテルギウス プロキオン
冬の大三角に囲われた物語から
ひとり離れ
遠い地平を見遙かす昂
あえかな光を受けて
指先がなぞる太古の記憶

天空に刺さったまま
白い牡牛は戦いつづけ

ぎくぎくと河原を踏む
渡ることでできない水の深さと
渡らなかつた歳月の長さ
いまは
風を測り
王冠を捨て狩人を待つ
ぎりぎり引かれた弓の気配に
振り向きもせず
氷原を蹴る

星をなぞる指
その指が切り裂く緑の沃野と
咲き乱れる花苑のそよぎ
オリオンの一振りが
音もなく闇に飲まれ
もう一度天を指すとき
深々と影を宿す新しい物語
始まり
巡り
会い
また巡る
熱い摂理のただ中に
遙かな南を指して

◆火の葡萄

有時秀記

実りゆたかな葡萄畑に風がおとずれ、日の光が雲におおわれる午後、葡萄の房のみえる家で静かに赤い液体を飲む。強い風雨は数時間つづき、夕刻に止む。と、葡萄の房が地表のあちこちに落下してうめいている。幾多の葡萄のうめきは嵐の迫害であるが、その地下の蔵には人の寿命をゆうに超える時を醗酵しつづける赤い液体が眠っている。醗酵がわたしを屋外へ誘い出す。落下して傷んだ房を避け、酔いをさまそうと森に入る。夕刻のうすやみは、しかし、たちまち消え、月明りすらない夜にとりまかれる。黒くろとした漆黒。一点の光もない漆黒。醗酵のなか無意識のうちに既にうごめいていた漆黒。宇宙論的漆黒の顕現。この漆黒のなか、もはや一步も進むこともできないので、足の感触がやわらかな弾力のある場所、苔のひろがる地で、そのまま夜明けを待つほかない。苔のベッドに眠りにつく。酔いがたちまち眠りへ導き、夢にはいったかと思う瞬間、地響きが聴こえ、苔のベッドが大きく揺れる。木の裂ける音、倒れる音がつづき、苔が陥没する。体ひとつをすっぽり嵌め込んだ、穴のような場所、倒木におおわれ、身動きがとれないなか、漆黒が時を刻む。水のかすかな流れが背後で聴こえ、かすかな光が動く。蛍の光なのか、しか

し、すぐにその光は消え、冷や汗と、酔いと、痛みの混ざった言いようのない感覚が、身動きのならないなかで持続し、深い昏睡がおとずれる。

おおいかぶさった樹木の重みが、昏睡夢のなかで、裂け目を生む。体が裂ける。神経が切れる。心のゆらぎは火花を四散させ、分裂の痛みは激甚である。痛みだけが存在のあかしであるように、漆黒のなかに強い痛みのみが浮かぶ。浮かぶ痛み存在。痛むがゆえに存在する。逝きし人びとの面影がとおる。謡曲の名手とうたわれた面影。蛇皮線をひく面影。オキナワの地で非望の戦火にたおれ伏した面影。大陸の戦いのなからうじて生きのびた面影。遺影に残るのみの早逝した面影。はやぐ中年をすぎ没落の晩年に永眠した老翁。慈愛のまなざしの媪。さらに加速する自画像の変転。ときに空の美貌をおそれる幼少。倦怠がうみだした青い閃光が至上の賢者たちにとどくと夢想するわたしの、顔が裂け、体が裂ける。二つに、三つに、多面体に。体の分裂はサクリファイイス。便器が泉である時代が過ぎ、泉から湧く涙の玉が宝玉になり、玉器を生み出す。玉器のなかで分裂した多面体が漆黒の夜を通過する。逝きし賢者のなかに友を得るために分裂をつづけるわたしのサクリファイイス。

夢は分裂するのが本質である。自画像が分裂し、夢のなか、小さな灯りが浮かぶ。蛍の光のような灯り。かすかな水เสียงの生みだす蛍が無数に増殖する。臨死のわたしをとりまく

蛍の群れがわたしを運んで漆黒の彼方へ連れていく。光る蛍の群れがかたちづくる飛行船。その飛行船に守られ、やがて途方もない大河にいたると、蛍の群れは光る橋に変わり、わたしの残余を滅尽したのち、向こう岸へたちまちのうちに越えるのだ。橋は滅尽の太鼓橋と呼ばれ、こちらからでは向こう岸が見えない反橋であるが、夢のなかで熱のように覚醒したわたしには視え、渡河ののち、振り返ると、迫害者は漆黒に沈み、光る反橋を渡りえない。渡河の地は、光る蛍が群生し、そこでは、逝きし人びとの面影そのものが光の像となり、分裂の魔術から覚めたわたしを親密な家族のようにとりまき、花やぐ異言で語る。わたしの顔もまた光の像であり、不滅となづけられた花々がまわりに飾られ、ゆたかな気分が満ちる。泉からこんこんと湧きだす花、色、光、息、苔。

苔の森には地霊がいるという伝説がある、と先人が語ったが、苔の森の下生えが地下の蔵につづいているのはそのためだ。人の寿命をゆうに超えて醗酵した葡萄の赤い液体を十字架の刻印された玉器から、静かに飲んでいるのは、苔の森でみた夢から目醒めた夜明けのことである。目醒めの寸前、顔には、光の残像が蘭陵王の仮面のようにかかっていたが、熱の夢にいぎなう火の葡萄の、赤い液体が、十字架の玉器からわたしの体に浸透し、異言を解するものという証しに残されたものか。これが、火の葡萄の示すもの、裂け目を超えたものの、光る、声だ。

◆いつか来たこの街の遮断されたこの街に

大橋愛由等

坂道づくしの街に夜のとばりが早く降りるのは街灯たちがこの街の斜面角度に嫉妬しているからに違いない

角を三度曲がった末に近づいた山の斜面に向かって急ぎ足で駆け上って行くのは寄り道ばかりしていた朝の海風であるのはこのところ毎日くりかえされていることであつた

焙煎されたコーヒー豆の香りが裸木に張り付いたままになっているのは失格した冬蛾のシワザであるのかどうか

山上の聖女が薄衣の中に隠し持っていることが分かったのは遮断された色彩を「それはきつと青だつたんだわ」と言いはつたために露見したのであつて決してメリーゴーラウンドを輪廻転生と間違えたためではなかつた

「山羊チーズを食べた後にするべきことは」とマスクを外さないバイラオーラから問われたとすると問髪をいれず返す言葉は「あいいうえお」

「モズについばまれてしまったの」と明瞭に言うのは良いのだが他者への不全ゆえのありようであることはビニールハウスで作られた苺が乗ったシヨートケーキの味を推察するより確かなのだということはヘラルド・トリビューン紙の週末号に解説が載つていそうだ

◆虚無僧

中堂けいこ

こむそうがくる。それは匂いだった。路地の左手ずーと奥の角を曲がってこむそうがくる。匂いがするのだ。どのような匂いか。なににも譬えようのない匂い、それは激しい恐怖をとまなうので家族は幼いわたしが引き付けを起こすのを、うしろから羽僧が角を曲がる前に匂いがわかるのだった。匂いがすると泣きじゃくる。(こむそうがくる) 匂いはことばで括ればおそらく()のなかに恐怖も括る。

隣に三人の兄妹が棲んでいた。兄をトシオ、中の女兒をトシ子、下の弟をテツオと言った。トシ子とわたしは同い年だった。四人でよく遊んだ。同じように兄妹になってご飯を食べたりママゴトをしたりお膳を反して魔法の絨毯ごっこをした。家同士が屋根続きなので縁側の土壁に薄い隙間があつて、わたしたちは小さくなつてその隙間から行き来した。トシオの声がうちでしたりわたしが隣で晩御飯を頂いていたり、大人たちが気づかないのが楽しくて仕方なかった。トシオとテツオは近所をよく虐められた。二人が悔し涙を流すのをトシ子とわたしはうつむきながらじつと黙っていた。いつでもすぐに二人は元気になる。

こむそうがくる！ わたしが叫ぶとトシ子がわたしの手を握り、正体を確かめるといい、今度こそ編み笠を取って仕返しをしてやるといい、泣きじゃくるわたしの前で、そのこむそうがくるは強い匂いを発して玄関の引き戸をがらりと開けた。こむそうがくるは尺八を挙げようとして脇を離したときトシオが後ろから差し刀の鞘を引つ張つた。テツオが松の枝から編み笠を叩いた。こむそうがくるは着流しを翻して何か言つたが、わたしは匂いで訳がわからなくなりが、ぐるぐる回りをまわつてばかりだったが、編み笠の下は真つ黒で中身が無かつた。こむそうがくるはなににも来ない匂いであると大きくなつてもとても恐ろしいままである。とてもこまる

◆女神

寺岡良信

ヴィーナスが誕生した朝
海に生まれた文明を虹に譬へた人たちがゐた

哄笑する波の
残響は分厚い
刃こぼれのしさうなくらい
磨きあげられた冬麗を割つて
ときをり
驟雨がほどいては織る
虚空のまぼろし

だが
おびただしい雲が
裸像の胸の入江に流れこむ午後
祈りも弔鐘も聴こえぬ
南国の潮は

こんなにも明るいのに
祝福を受けた日から
女神の眼は愁ひにけむる
死と切り結ぶときのみ
澆漑と匂ふ薔薇の
甘やかな誤謬が
砂丘を酩酊させるやうに

海に生まれた文明を虹に譬へた人たちがゐる
その瞳はひたすら見ることで智慧を培つた
蒼く
遠く
潮騒と潮騒を結んで
滅びに堪へるものよ

何と的確な命名であつたことか
虹は悔いの同義を物語つてゐるから

高谷和幸

数日前から冬の庭に「いちご」ののぼりが立っていた。「亡骸はささめくしるしである」とあの都市の日付をとまなう発音しにくい言語。その誣告者の踵の痛みが風の動きのひたむきな翳りになって両肩を揺すっている。「ストロベリーの真紅の食欲」に庭がざわざわと動きだした。「いちごが欲しい」と無口だった庭が「しるし」を喋るのはいじらしいが、昔から人のあいだとあいだを失礼するわたしたちは無人のためにある貞節な庭であったはずなのに。はじめて歩む庭の窓からは、紅い時代の叙述の穂が縦に落ちる（次元の高まり）を消失点と見まがうような自分たちの詩句がなんとも哀れだ。あるいは母となる神話の入り口をカムフラージュして見えていても見えない日常の根抵当権のついたわたしたちの自己執着のまぶたのふかさかも知れない。まばらに看護人（キュレーター）が椅子に腰かけていて、ラインを踏み越えて、なじみのある甘酸っぱい風と照明器の光をほおばった。「いちごは感電もする危険な食べ物です、ときには密告もするんです」。誣告者によれば庭がわたしを裁くまで猶予があるらしく、長い通路に薄羽をつけた教晦師がこちらに来るように指示を出している。庭にしてみれば、「はじめから逃げることもできたんですよ」。わたしがわたしであることが、それ以外に何もしないでいられることが罰だとしたら、ニンフのような昼の月が地平線からのぼり、出口に吹く風が果物のかおりに被われた庭を見逃さない。歯に残ったいちごの「受難のたねだ」。

◆ 歌

富 哲世

口を開くと
夜の幔幕に浮かぶ裸木のシルエットが
グノームの宿りをなぞって
ゆつくりとにんげんの手足を差し渡しさわぎ招いて――
片隅で目覚め始めた記憶のように
林の影を浴びながら緩やかな勾配をのぼって来る
擦れ違う車の後部座席の闇から
ほそいほそいほそい
思い出せないことばのリボンが
水のようににぶく光って吐き出されるのが見える
水銀灯に照らされた
残雪の植え込みの上で
銀の沈黙は手を差し伸べたままスプーンのように身を閉じて
尽きた調べと
遠い葉叢の異形のざわめきを待つ
血の悲歌のなかに
ひとは確かにバスを降りた
ばらばらに壊れたうしろ姿が賑わうように振り向きながら蹲る平坦
な敷
石、の上に
泳ぎ去ってはまた寄せる
偶然を捨てるさかなのように
どかどかと歌うきみの鼓動の痕跡をさがして
ある日ふと道をたがえるように
古いじかんの眠っている
月明かりの見知らぬ街へ入っていくと

睦み合う影の倒れかかる
老いた親和の囁きにまじって
追想の中へ立ち去った
訳知り顔のものらの
乏しいいつこうに出合う
（旅芸人のように武装して）
街は想う
灯りの照らす四つ辻は静まっていると
荷車は松明を立てて通り過ぎると
日は暮れ
細い板を転がり落ちていくように
ここにすべてが在り
無いものなどもうどこにもないと
少しずつ
鞆は今の肩先をズレ
地に墮ち
野菜屑も手放しかけた物語もみんな無心に夢見心地で
月のしみる
運命を忍ばせた
メガミの世界で
眠りを護って黙って目覚めていると
ぬぐってもぬぐってもぬぐいきれない日々のさなか
居ないものだけが見ている
畑地と遙かな山並の風景
失せながら
眼鏡曇らせながら
秋にはばざりと葉を落とす一本の百合の樹となつて
ことばの終わりの
雨を
浴びて



★一月二〇日
中学生の時、民謡日本一となった
徳之島在住の澤愛香さん

★一月二〇日

第19回目の「奄美ふゆ旅」は沖永良部島からスタート。いつもながら前利潔氏（知名町中央公民館勤務）にお世話になる。今年も町正名集落に

19回目の奄美ふゆ旅 ぼくの島酔いは続く

とが出来た。会場となった福家には、シーサーズの持田明美さん（東京在住）も同席。この人は沖永良部に伝えられている歌詞でウタアシビができる能力を持っている。すごい人だ。去年、シーサーズが制作したCD&DVD「沖永良部島の創世神話〜島建てシンゴ」が第五回FMわいわい「奄美シマウタDISK大賞」（二〇一三年）を受賞したので、その賞状を持田さんと平沢千秋さんに島の空港で手渡した。

★一月二二日

二日目は徳之島に向かう。午後二時の和泊港発。海は少し荒れている。亀徳港では俳人・亘余世夫さんが出迎えてくれる。ホテルで荷物を置いたあと、伊仙町に向かう。本日は伊仙町議会議員選挙の告示日。四年前の同選挙では伊仙にとって始めて無投票となったが、今回は定員一四人に対して一八人が立候補する激戦となった。伊仙は奄美群島の中でも激しい選挙戦を展開することで知られている。

伊仙町伊仙の福留ケイ子さん宅に到着すると、もうそこは福留達也氏の選挙事務所となっていた。ケイ子さんの長男・達也氏は二期目に挑戦するのだが、前回新人で出馬した時は選挙を経験しなかったため、今回が初めての選挙戦となる。ケイ子さんには、去年、福留果樹園代表としての業績が認められて黄綬褒章を授けられたことを祝ってささやかなプレゼントを神戸から持参したので渡す。

余世夫さんと私は亀津に帰って返して、ウタシヤの澤愛香さんのシマウタを録音する。愛香さんは二〇〇四年の中学一年生の時に、民謡民舞少年少女全国大会（財団法人日本民謡協会主催）において「塩道長浜節」を歌って「日本一」の栄冠に輝いている。録音させていたがさすがに声に迫力があつて聴き応えが充分。本人もまだ若く真面目でこれからもまだまだ伸びることが期待され、徳之島にこうした逸材がいることに心強い思いがした。

★一月二二日

北に向かう。飛行機で奄美大島へ。南海日日新聞の久岡学記者が空港で出迎えてくれる。沖永良部島より徳之島、徳之島より奄美大島の島の大きさをいつも実感する。群島の中心地である名瀬市街地へ。南海日日新聞社に赴き、インタビューを受ける。去年の奄美は「復帰60年」で盛り上がった一年だった。しかし島ごとに復帰に向かうようが異なるのではないかと思っている。そして去年は、「奄美で生産された砂糖が薩摩藩の倒幕資金にどれほど貢献していたのかの論争」と「自民党代議士・徳田毅氏の医療法人徳洲会とからんだ選挙違反事件」が起きた年でもあった。

夜の飲み会が始まる前に、一件寄りたいたいところがあった。本処あまみ庵。森本眞一郎氏に会いに行く。都市区画事業のためにとくに店を閉めていたと思っていたのだが、ビル所有者の都合で立退きが伸びて去年と同じ場所が営業していた。何冊かの本を買い、奄美のことを語りあう。店の営業時間が終わったら飲みに行こうと誘ったら意外なことを言う。「去年あなたを殴ってから思うところがあつて酒をやめた。だから会おうと呑んでしまうのでいかにい」。

詩と評論

月刊『Mélange』VOL.89
めらんじゅ

2014年02月16日 通巻89号
発行所/月刊『Mélange』編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集人/大橋愛由等（『Mélange』同人）
Mobile 090-5069-1840
maroad66454@gmail.com
定価 500円（税込）